



# 「頑丈なバインダー」

NPO 法人劇団仙台小劇場

劇作家・演出家 石垣 政裕

ちょうど2年半前のクリスマスが近い時期に、ドイツの保育園や小学校を見て歩く機会がありました。友人たちの家の近くというだけで紹介された、特別に選んだ施設ではないところでした。私自身は、保育や教育の現場で演劇がどのように活かされているかを垣間見にいったわけですが、そのときのことをお話ししましょう。

ある保育園で、年長の女の子が私たちを案内してくれました。そう大きくない保育室などを次々と案内してくれました。「ヴァイター（次に行くよ）」と促す彼女は、時々大人のような表情をします。扉を開け外に出て、庭を見学し、もう一度部屋にもどるときには、訪問客の私たちの足元をしっかりと見ていました。この女の子は、親や先生たちが他のお客さんを案内するときの仕草をしっかりと観察していたのかもしれませんが。私たちはその案内の仕方に舌を巻いてしました。

その「小さな案内人」は、ある部屋で棚からかなり厚みのある頑丈なバインダーを取り出してきました。このバインダー。もう30年近くも前、ドイツに住むことのあった私が使っていたのと全く同じ物です。作りがしっかりしていて何十年たっても壊れませんから、当時フリーマーケットでもたくさん売られていました。

若かりし頃の懐かしさに浸っていると、これは私自身の「ドキュメント」だと頁をめくって中を見せてくれました。中には彼女の入園の時からの写真や手紙、制作した作品が綴じられていました。先生の話では、ひとりひとりにこの「ドキュメント」があり、先生や保護者だけでなく自分自身がいづでも棚から手に取ってみることができるというの

です。「小さな案内人」は丁寧に頁をめくるたびに言葉が少なくなっていました。

「ドキュメント」。文字通り自分の「成長の記録」を自分が作って、周りの人たちとともにそれを認めていくことに通じていきます。ふと、30年近くも前、ドイツの学生や子どもたちがとても自信たっぷり、私からすると『えらそう』に見えたのはこういう教育があったからかもしれないと、なにか、突然に固い結び目が解けたような気がしました。

データを目に見えないところに格納でき、いちいち書類を探さなくても便利にはなりました。そして、どうやったらそれを保護するだけに苦心している私たちは、その手づくりの「ドキュメント」が子どもたちを育てるときの大切なところにしっかり繋がっているということに気づかされたわけです。そしてSNSのグループでしか人間関係を保つことができない私たちにも、自己肯定感の低いといわれる日本の若い人たちにも、この手づくりの成長の記録「ドキュメント」からなにか学ぶことがあるかも知れない。もしかしたら演劇も、こんな役割を果たせるかも知れないなどと、今あれこれと思いつけています。

